

文化事象を中核とした中学校社会科歴史的分野の授業開発とその評価

教育実践高度化専攻
授業実践リーダーコース

P08026D

三河 祐太

1 問題の所在

現行の社会科歴史教育における文化史学習は、政治・経済史学習の後に位置づけられており、常に付随的な扱いで学習が行われてきた。このことは、文化事象の羅列的な注入と、生徒に暗記を強いる学習となる1つの原因となっている。

2 研究の目的

本研究は、文化事象に関連した問いを中核に据え、政治・経済事象と文化事象とのつながりを理解させる授業開発を行い、その有効性を検証することを目的とする。

3 研究の方法

- (1) 先行研究の整理より、本研究における「文化」を定義する。本研究における文化を定義した上で、社会認識教育では、文化史はどのように学習すべきであるのか明確にする。
- (2) 過去の学習指導要領から、文化史がどのように位置づけられているのか検討する。そして、学習指導要領の記載との整合性を確かめるため、教科書の記載内容から問いと知識を分類し、文化史学習の先行実践を整理する。
- (3) 学習指導要領と教科書の記載内容の検討結果、先行実践の分析結果から、文化事象を中核として、豊かな社会認識形成が可能と

なる文化史の授業モデルを作成する。

- (4) 実習で実践した文化史学習の報告を行い、その授業の特徴を示す。
- (5) 授業実践で収集したデータを分析・検討し、今後の文化史学習の課題を明らかにする。

4 論文の構成

序論

第I章 社会科教育における文化史学習

第II章 現行社会科に組み込まれた文化史学習の分析

第III章 文化事象を中核とした文化史学習の構成

第IV章 実習における社会科授業の実践

第V章 授業実践における成果と課題

結論

5 研究の概要

(1) 社会科教育における文化史学習

文化人類学、歴史学、社会科教育学の視点より本研究における文化を定義し、社会科教育学の視点をもとに、文化史学習で扱う文化を分類した。そして、社会科教育学の視点より、文化事象から社会の仕組みを捉えることの意義を以下の2点にまとめることができた。

- ① 文化事象を通して社会の仕組みを理解することで、社会科としての文化史学習を行うことができる。

② 文化事象から政治・経済事象にアプローチすることで、時代像をイメージしやすくなる。

(2) 現行社会科の文化史学習の分析

学習指導要領の検討、教科書記載の分析、先行研究の分析よりわかった社会認識形成に有効な文化史学習は以下の通りである。

- ① 教科書の記載内容や教科書以外の社会諸科学の研究成果などを素材として、なぜ疑問に対応した説明的知識を習得させる学習。
- ② 「問題発見→仮説→検証」の概念探究過程をとる学習。
- ③ あるミクロな文化事象を中核とし、通史の中にも文化事象をちりばめていく「中核・一体型」の授業形式を用いた学習。

(3) 文化事象を中核とした文化史学習の構成

これまでの研究成果をもとに、小单元「鎌倉幕府の成立」で、「寄木造り」を中核的題材とし、小单元「近世から近代へ」では「反射炉」を中核的題材とした授業のモデルを作成した。

(4) 実習における社会科授業の実践

実習では、小单元「近世から近代へ」、「近代日本の社会と文化」、「大正デモクラシーの時代」の3つの実践を行い、小单元「大正デモクラシー」の時代において、「中核・一体型」の授業形式で学習を行った。

(5) 授業実践における成果と課題

本実践で導き出せた成果と課題は以下の4点である。

- ① 「中核・一体型」の授業を行えば、文化事象と政治・経済事象を関連づけて捉えることができる。
- ② 「中核・一体型」の授業を行ったからといって必ずしも知識量が増えるとは限らな

い。

- ③ 文化事象を中核として授業を行っても、政治・経済事象が印象に強く残る場合もある。
- ④ 文化事象を中核に据えると、文化事象の基底にあるものまで理解することが容易になる。

6 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

- ① 先行研究の分析より、現行の文化史学習の改善プランは、ある1つの時代を学んだ後、文化史の単元において、文化事象を中核に据えた「中核・文化分離型」が限界であるということ。
- ② 「中核・一体型」という文化史学習の理念型を提案でき、その理念型をもとに授業開発ができたこと。
- ③ 「中核・一体型」の文化史学習を実践した結果、37名中20名近くの生徒が文化事象と他事象とを関連づけて捉えることができていたということ。

(2) 研究の課題

- ① 「中核・一体型」の授業を多く開発し、他の授業形式との比較が必要であるということ。
- ② 他の授業形式の授業を実践し、比較することで、「中核・一体型」の授業が社会認識形成に有効であるのか、さらなる検証が必要であるということ。

修学指導教員 天根哲治
永田智子
指導教員 吉水裕也